子どもと共なる日々

佐野恵子

はじめて母親になって

子育ては、「私にとって意外なこと」が、波のように押し寄せてくることから始まった。まず第一に、十か月間胎内で、ごく健康に過ごしてきた長男が二・五kgというおチビちゃんで生まれてきたことである。三kg以上があたりまえ、と考えていた私にとって意外なことの始まりであった。

次に、母乳との戦いが待っていた。完全母乳は母親の努力次第。今の母親はその努力が足りないんだ、と生意気にも批判し母乳主義をかかげていたにもかかわらず、意外に難しく、世の中にこうも大変な事があったのか……と感じ入ったのである。

第三に、長男の歩き始めが、のんびりと一歳四か月。我子は、一歳二か月頃には歩くだろうと思っていたのだが、意外であった。この頃、妹が生まれたのであるが、二人して指しゃぶりが得意で、兄は、三歳すぎても妹と一緒に哺乳瓶を愛用していて……etc。

これでいいのかしら……とある人に話したら「あなたがそんなこと言うなんて……」と笑われてしまった。その時私は、「だって、始めて母親になったんですもの」と絶句してしまった。誰でも子を持って始めて母親になる。あたりまえの事なのに、私にとっては、とても重要な事であったのである。

今になって、自分の生き方を振り返ってみると、自分の歩もうとする道の先に何があるかを確かめてから、その道にそってマイペースで歩いていく生き方に慣れすぎてしまっていたこと。大よそのことは望み通りになってきたこと。長女が生まれる少し前までは、学生であって、知恵遅れといわれる子どもたちについて学び、その子たちの多様性は認め、理解してきたつもりでも、普通に生まれてきた子たちに関しては、なまじかじった平均的な発達過程が頭にこびりついていたこと、これらが、私を戸惑わせたのではないだろうか。本当に、我子に直面して、人生には、思い通りにならないことがあること。全ての子どもたちは生まれながらにして心身共に発達の個性を持った存在であることを実感として知ったのである。このような事実を認めることから、私の育児は始まるように思うのである。

私が、自ら家庭に入ったのは、自分自身で我子の成長を見つめてみたいと思ったからである。あまり得意でない家事に追われての育児は、思うようにいかないことばかり。相変らず体の小さい長男は現在三歳四か月。のんびりやで、人一倍愛情を受けたがる子どもで、友だちと思いきり遊び始める一歩手前の状態である。妹は二歳。兄とは反対の性格のようである。毎日、子どもの要求をしっかりと受けとめてあげているのだろうか？　このような育て方でいいのかしら？　失敗や反省は、数えたらきりがないのです。それでも、毎日新しい発見があり、驚きがありして、結構楽しく暮しているのである。前置が長くなってしまったが、ここでは、育児の楽しみを、子どもの成長と共に述べてみたいと思うのである。

生活の中で子どもと共に

兄（二歳三か月の時）は、部屋の中で、積木を並べて線路と汽車作りに熱中している。しばらくすると、今まで一列に並べていた積木の上にも何段か積み重ねて眺めている。煙突のつもりなのだろうか？　庭にいた私のところに、満足そうな笑顔をしてやってくる。そして、また汽車のところに戻っていって遊び始めるのであった。

そして、一か月程たつと、かなり複雑な汽車を作れるようになり、遂には、トンネルを作り始め、積木の汽車遊びは頂点に達したようである。と同時に、一人では遊びに行けなかった彼が、外で友だちと遊べるようになり、積木

も、東京タワーやクレーン車のような高くのびるものを作り始めたのである。そしてある日、急にダイナミックな遊びが出現した。それは、父が、赤い大きな箱を持ち帰ってきたからである。その晩は、その箱に入って電車のつもりで走らせてもらって喜んでいた。翌日、その赤い箱を先頭にして、オモチャの入っているいくつかのダンボール箱、脱衣籠等を一列に並べ、その中に、積木・衣類・本・トイレットペーパーをちぎった紙片・スプーン・哺乳瓶etcの手に入るだけの身のまわりの物を全部詰めこみ、一番先頭には、筒状の紙屑入れをひっくり返して置き、座蒲団を置いて座り、「けむりモクモク」と言って得意そうにしているのである。妹も中に入って楽しそうだ。(今までは、自分でも作ろうとして、兄の汽車を崩したりするので、けんかとなり、二人して大声で泣いていたのだけれど……)

こんな遊びの過程を見ていると、彼の心の中は、ここに至って、汽車のように力強く押し進む力と、高く伸びようとする知的な高まりとが混然として、発達の節が作られてきたように思われるのである。ダンボール汽車は、彼の成長を意味しているのかもしれない。

その中に、スプーンや哺乳瓶、積木を始め、彼の身の回りにある、ありとあらゆる物が加わっている。この事をとてもおもしろく思ったのである。母親が、生活そのものの中で暮しているその中で、子どももまた、生活と共に成長していくこと。そして、もうじき三歳だというのに、まだ時々、哺乳瓶で飲むんだから……とこちらは心配しているのに、本人は少しも気にせずに哺乳瓶を携えて成長していこうとしていること。トイレットペーパーや、紙片のような形にならない物も携えて成長しようとしていること。言いかえれば、成長するためには、形にならないものも必要だということを表わしているのではないだろうか……。あるいは、汽車のすべての荷物が、彼の未分化性を表わしているのかもしれないとも思えるのである。しかし、その未分化なものも大切にしてこそ、個性を持った子どもとして成長していけるのではないか、彼の汽車がそんなことを教えてくれているように思えるのである。母親と共に、形になりにくい日常を過すことの意味も、こんなところにあるのかもしれないと思うのである。

そして、二歳十か月頃から、ごっこ遊びらしきものが始まった。女の子だったら、ままごと遊びなのでしょうが、彼の場合は、清掃車とおじさん。石油の小売車とおじさ

ん。牛乳の小売車とおじさんの遊びなのである。この三台の車は、皆、独自のメロディーを流してやってくるのである。最初は、メロディーにつられ、曲にあわせて首を振り振り聞きいっていたのだけれど、そうしながら、おじさんがどんな事をしているのか、よく見ていて家の中でそれを再現するのである。掃除機が、石油タンクからのびるホースとなり、屑籠に注入し、テレビのチャンネルが計量メーターとなり、炊事用の手袋をはめて歌を歌いながら石油のおじさんになりきってしまうのである。そして、清掃車と牛乳の車は、それにふさわしい形のダンボールが偶然に手に入った時から始まり、ストローで煙突をつけたり、積木をスピーカーに見たてて上に置いたりして、細かい所まで再現していくのである。

清掃車は、積木・紙屑・台所用具etcをどんどん放りこんでいって蓋をする。牛乳の車も、積木が牛乳になったりヨーグルトになったりして、箱の中に並べられ、「ハイ牛乳です。三百えんです」と売り買いが始まる。歌を歌いながら、それぞれのおじさんになりきっている感じなのである。こんな遊びをしている彼は、本当に生き生きしていて楽しそうである。外で友だちと遊んでいても、疲れた顔をして帰って来ては、ゴロンと横になって指をくわえながら天井を見つめていたかと思うと、やおら立上って、清掃車（ある時は別の車）を引いてきて遊び始め、元気をとり戻しているのである。こんな様子を見ていると、これらの三つの車は彼の砦、精神の充足場所なのではないだろうか……と思えるのである。しかも、これらの車には、そこで働く人があり、灯油や牛乳を買いに来る人がありで、彼は、これらの人々と同化し、社会に開かれているのである。

このように、生活の中で、創造的な遊びをしながら育っていく我子を見ると、共にいるだけで楽しくて、家庭にいて良かったと思うのである。

自然の中で子どもと共に

二月（兄二歳、妹六か月の時）、裏山に散歩にでかける。道に草が垂れて風にゆれているところにくると、兄は、「メーメッ」と言って恐そうに立止まってしまう。私が「草なの全然恐くないの」と言って、後から押すと、やっと前に進む。しばらく行くと「ウーウッ」と力をいれて、また立

止まってしまう。「草なの。全然こわくないの」と言うと「ゼンゼンコワクナーイ」と言って、思いきって通りすぎる。あとは、自分から登って行き、頂上に着く。頂上からは、家々が散在し、その中を電車が静かに走って行くのが見おろせるのである。兄は、切り株に腰かけて電車の通るのを見ている。空はまっ青。ヘリコプターが通りすぎていった。その後は、時々通る電車の音と、ザワザワと騒ぐ風の音だけ。座っている彼のところに木の葉がのしかかって揺れている。彼は、それを見上げて恐そうな表情をするが「ゼンゼンコワクナーイ」と自分に言い聞かせるように言って、そこに座り続けている。妹は、背中でスースーと寝息をたてている。絵のような情景がそこにある。恐さを乗り越えて、そこにいようとする張りつめた彼の姿がある。

九月。「クモコワーイ!」と叫び声をあげて兄が、家の中にかけこんでくる。そうして、東の空の方を見上げて「ほら、コワーイ」と私に言う。そこには、まっ青な空にまっ白な入道雲がモクモクとそびえているのである。とてもきれいでダイナミックな雲なのであった。また、夕方になって、空が赤く染まっているのを見て、「ゆうやけコワーイ」と言って、私にしがみついてきたり、大きな、今にも落ちてきそうな満月を見て「おつきさんコワーイ」と言って震えているのである。でも見たいのである。

こんなことから、自然に対する恐れと畏敬の入り混じった彼の感情が伝わってくるのである。そんな子どもたちと共に触れる自然は、今までとは違った新鮮さを感ずるのである。そして三歳をすぎた彼は、「雨どこからくるの?」「どうして朝になるの?」などという質問をして、私をドキッとさせているのである。こうして日常性から少し離れて、子どもたちと空を見上げると、とても良い気持である。私の心を澄ませ、明日の力を与えてくれるような気がするのである。

最後に

子どもと共にいることは、私自身を新たに発見することでもあると思うのです。この時期を大切にしていきたいと思っています。